



頁  
113  
4386

日本河方人集  
新加  
可りて下五女

儀の持

諸必は好色に得恨巻之二目錄

金瓶の五名を江戸の  
常約よを海よりいふ

一 廿花の大意を後合

長生寺の光のあつて  
海乃初巻世の利也

二 今合は之焼野

むけおの屋のうらや  
流れより心中れんぞう

三 大焼の伽羅の胸の煙

今れ月小志ぬむら  
いつるもれ神よ突しれ

四 野良の浮世の費

後れ懸りく屋の  
こはまはけりて懸れ

五 海小紋の紙

衣小襟てうけらるる女  
村なりぬ水あひせたり

六 伯母根の巻の図

伯母根の巻の図  
 二夜まよふ人の図



諸国此好をかりん根巻之二

車新れ大そ巻の根命

死後小甚花れ得てて即来小色しし中前一夜は世  
 根ありてこれぞ京大阪をわかつ津浦くは根里  
 凡そくも道所作さうらぐわ敷とほりて人の心  
 移ららまらハ半く一は味小あり家よ本列れ新吉  
 京ハ方ハ丁より二大門口と社さをも内よ掛は株は門とまから  
 危あげ危くハ三味線のを志ち止るなく摺押れ寄  
 平等ゆて色くよそく焼けむりハ新福とをきて  
 雲わよまびさ海と小ちうびかさ内新れ里行りいそや  
 今れをよせきて一代揚危れけけ今を幸中とくを

三二

二

十露盤よつてくぐりてさきもくもくものしかなし又極楽  
小倉里のあつた地獄の野良うけまらあつたをらたて  
きくものさきをれを死でれ樂もいんるが  
とくへ命の内れ樂こそ樂なれと志波のよや  
小倉らたてあつたてつてつてらんらぐ寧ろあつた  
れ敷とまらむどがむ中めも買らるるさうさうさ  
海らつた小倉の粟ぐものあつた比の近實れらさう  
多本町一丁目と云ふ小邊をさうとて兵服の海貴  
買して二季れおすめも今れ日又好れ花小いびさ  
かくれおすまらまらまらあつたおすまらまらあつた  
一たれおすまらまらあつたおすまらまらあつた

かり式附がれ果よつてや像も小倉さうり多本町  
とふ葉やうお下よ金りらららららららららららら  
小倉橋のまらさうさうさうさうさうさうさうさう  
お油あつたやうさうさうさうさうさうさうさうさ  
足がぬかを流の下踊とゆき丸舞がれらららららら  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
おくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
たらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
へ後境よりさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
ぬるふあささうさうさうさうさうさうさうさうさ

全盤に云中なりせしうらとぬく平中水納て  
 うつれ他を東をさぎ一やあつりやし云師どもとあ  
 けわがらしきしきるよとくく常れ可作よあて  
 かしとまらう十たらの美をれを著小なりうし  
 ばく便もなしくいしる凡とほくも一他業と  
 左のハ行一あれ一たして文とまよふまに  
 かまき一とらんともくさんもろ六十余りう  
 さかく混れ目とさるをせんともなるべし  
 目小るの重は二人のものハ先ハ後やま  
 いらつ成れり一か一上上とらとせう  
 れくしあがせし色も又あささうなゆるて

又麗も下りまうしとらんやうらま  
 十たらのまろし衣おの陸と一を  
 舟よあらんとも名をぬえぬう  
 ておじよ婦ハ上後とらし  
 おむろげすら而腰と云娘ハ  
 じぬらえしけらろがんとあ  
 身取ハ枕ねと入て早後とあ  
 やく薄おとせしと目比長  
 しゆかたれをとうく大足  
 らやじ沖小おまひん  
 花子しぐく敷舟と押ぬ





僕も燃してきこひとち目や焼くかアと云ふと  
ふれん男の女に枝と云うて本こしと云ふの  
家その里の娘のつらさうがうと云ふも  
後弟川北波の娘と云ふと云ふと云ふと  
みー浦と云ふと云ふと云ふと云ふと  
火をたいてききりけしむと云ふと云ふと  
とく柏木と云ふと云ふと云ふと云ふと  
かき費あるしひと云ふと云ふと云ふと  
使たる坊げやけと云ふと云ふと云ふと  
焼くとも云ふと云ふと云ふと云ふと  
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

るしめしなりと云ふと云ふと云ふと云ふと  
小巴只者と云ふと云ふと云ふと云ふと  
雲いと云ふと云ふと云ふと云ふと  
当次子月と云ふと云ふと云ふと云ふと  
太夫の白端と云ふと云ふと云ふと云ふと  
うまると云ふと云ふと云ふと云ふと  
小浦と云ふと云ふと云ふと云ふと  
衣通と云ふと云ふと云ふと云ふと  
報りてと云ふと云ふと云ふと云ふと  
と揚と云ふと云ふと云ふと云ふと  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと





けしうつらうていなるまはながい入ときをゆしうりて  
 うめしちびあぶらむりうそ巻の茶とゆるふふ  
 りれよまの茶ととりゆしうて云やがて園へて  
 んろよしうりて井戸巻りてあつあつ  
 津波のいりてゆしう浪れゆしうて紋波は敷  
 張天井とゆしうけりあけりうぬんみととり  
 ぬりてゆしう中つぎれいあびりてゆし  
 里松よまの茶とゆしうて包りてゆし  
 てとりてゆしうのふ茶よまの茶とゆし  
 てたしうりてゆしうてゆしうてゆし  
 して居るへ太史八時代前後の巻とゆし







八洲川此川れ新やとうるそ大寺に存れりと云を  
 花火此秋は浅系川の大船とうるそ我が下れ驛の空  
 と惜之冬は面見せれ御成約て我母女更機友に合屏に  
 成とちしせ佐玉巻とかけてとと見せきみりりれ  
 鬼どもにいむ俗眼とさるそりりれ花とち男と女とを  
 主役志ふつてるそで同車にむしりり野良の年巻  
 下りしむよ機友へ来り候し危れぬりりりとな  
 せ七五たのこすれなどあれ鬼け子なれはあざり  
 いたくふいとぬあつとぞこれ中ふも若めりわの機井  
 山之島と云大女と云人そとらうら顔かた色とる  
 い柳が下り柳村八秋年此年此化方しと人掌

とあをせて是と松母を物きなつ八初ん孝ん此松と云  
 こそ道東の教志げくも清れ松山酒の越ともしも花  
 到にけは柏木が情とすつてとらりや子孫れいそ海  
 てもあをせせりきとれはやうらりり我親にと  
 足ころりそいの中へ回年八孝くぬお拾貫目入代銀箱  
 かつともけりうらりるそ夕一内此水月巻新とけり  
 たあくかろけけあろ子たおあひて八二世とけけと柳小  
 肉は盛るて八前巻とけりいけは若れぬつこらと六  
 及哉とけりしねとらやうも清氣流るれ書て病  
 ろし面白きなり一七城柳小にがゆや後とら  
 ありなまうらにぬたうらるそ金とけりりりり





花より親仁にまゝ白くして髪四れ入目か何れもせ  
けりきり何れにやわサレ年此其の比らと七志也  
うらふ久きをぬやうに引身して其れ多し一風  
信也師道中よりあらわれむりなく寺とゆづらまよ  
るものやまゝなりてつ最あるまゝもなうふあ  
たぐひはくみ彼れ酒うりるふ易なりいつ  
継けと云地味ゆらばれその味もまゝうつくひた  
かひひしりれお骨気よくも言物として堪へて  
にまれば娘小卒のわりも白く眼もさおわらび縁ど  
れくまのしめづいあどまうけもさばたあをせく  
おこさうて密通せしははれぬまのく字ては殿と縁

ら重令て倦之勢一と天命はかまがくも縁ども空  
付て開代官へ折六寸角とせとまらんときうくどら  
中安一よりまゝと六夜趣あしてとけ墨れお下  
ひまよふるやハキし電大笑ひしそかあらぬ  
まゝのよまゝのりみ縁  
おしりしはくかぬお八松風かうお礼者ともま  
中つむつど地うし太丈もあやうしむうし  
とけ墨れうき勅と白地お鏡るに父ハ兼系れ何  
少そ昔時雷電とまきけりたる勇士此未孫も  
去大家おまけりお石余多りして内りそハも梅子  
小姓とつらひ飯おおへおうもむくまの星み中





清くしてそれほくさ紙をわがせ海をわくと大文を  
 備合紙ららひてまはかるふうれれありめてまづり  
 於十四貫目の中は多しす先とそれらて袋小細て海と  
 若目と標三浦がわく標者たるは既し里乃若也と  
 らくしんハ三海家それやう一巻のゆりありと此箱  
 と後心がさうしきうて梅窓りりふ上層方より入射  
 ちくく杯もそ紙水そきほつしき海しきも多く  
 乃筆押紙巻前にありてゆりまづ一巻ハそれ若  
 志雄乃君らりしと也三巻れ巻がこふありてりしかや  
 細紙子の丸紙系れ大標紙とりのがしりて大長れ細紙大  
 小に合後標れ布袋持さうしきゆり小標しん紙は持つが

糸をそひひふれ深なる海津満面の衣衣は巻くはそく  
 だらや一文字れあひ差を懐と一巻にふら紙こあそ  
 不凡流杖りしひあまや一巻乃巻しけとそそ  
 そのまうにおの上ひに依らせり二巻もまうしき  
 ほう雲れうすそでまうらる若しや標れ紙衣れ神紙  
 巻しそれとに標小用し一巻れ若本れ花乃巻れ  
 てこふ小若紙紙相寝髪はひつとれ後り音紙ま  
 あふまそこのしきあや若りしきとけらるる命のま  
 るく紙紙れせりり三巻にまうはむしきしき  
 され吹ちのがしりて人とは育の围りてく焼  
 多やう小細る三味乃まらしきしきしきしき



三十一

三十一

三十一

三十一

戦姫とてははげしくも小作らせし百の若きあふ  
 徳業をいつづきていりけれ多なるはの風ふらび  
 こそまゝらひ吉野秘傳の華少てもまよふといふと  
 あやしまる上郎とては八巻若小なひくもあはれ  
 の時をたそでれぬをあら高くともさみでござ  
 若きついでつとぬ一ふ翠三味傳は事成りしへてま  
 たり成りゆいゆい一統のあとうけしるは  
 まるしてれをたひ門色小松ハ事そ経どもそが降  
 れつ飛く飛  
 伯母松ハ意乃園をゆ  
 人の親として娘の子をたたくもせめ神とともせ

盛れ賑ふまじりてせだがるこころをなれ柏木娘入此  
 あらう目らりらちや米れつきなつと味略れ境うきん  
 多浪れ目利まそあやうひんをなひねくハ十た  
 くら先よれさひ代たハあささうん世をさうりて  
 暖着と柳とてと角うと角中で氣と射射まあ  
 小つとてしてよその内役の益寝と想つと出笑  
 かなれどとそ十たらとも掌の中たわらむれま  
 あがわあひひ風曲もあてあやうふまこれ十たらも  
 安んぢなりひねり一内事ハ女どもはあとうら  
 向うせをれ身ハおきてむを成法としむりども教養自  
 ひにまててめてさうとまへに女つ乃れ





たぐえ下向よ並本の葉やへあるらん城呼てらん  
は清いよ若系とよみしつああるまひりあまは  
でならんた又ききとつあいらあいらあいら  
又多うつて居やるやうと云付七き氣ハ球しりも  
あつまひふいでなまをまてやうと真を神心と  
呼吸しつてゆけ七き氣よるせとてくきき  
とあつたこれハ臍のついでまよて城ひ移りてく  
御連と祢らうびととせふくさうけてつやも  
あふともいふやうとて帯海の下にならん  
ハ七きもこのあつらうはらうあつらうさうさ  
うらとてまううらうらうらうらうらうらうらう

とくきくぐいんて城きしてさふもたう  
くと二声ニんハヨハもいんてうそれよりと  
もなりくあつたせうとてあつた私もくと  
みあふすうらうに二人はあつた肉あつた三  
交うあつたあつたして首尾よく肉あつた  
ねてふもてあつたせうとてあつたあつた  
それぐくとあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつた

あつた

云々

拂<sup>フツ</sup><sub>不都</sub> <sup>テ</sup> <sup>イ</sup>  
改<sup>カ</sup> <sup>イ</sup> <sup>カ</sup> <sup>ク</sup> <sup>ク</sup>  
各

一が女房ハ寺方よ云々如高れこのものになりり土多ち  
くしやうたれ住居江戸中ふけははるむとちなりし

諸玉に比初りハ帳巻二終

舟本 何し初

沙有少

早迷沙

系

廻 漢金



